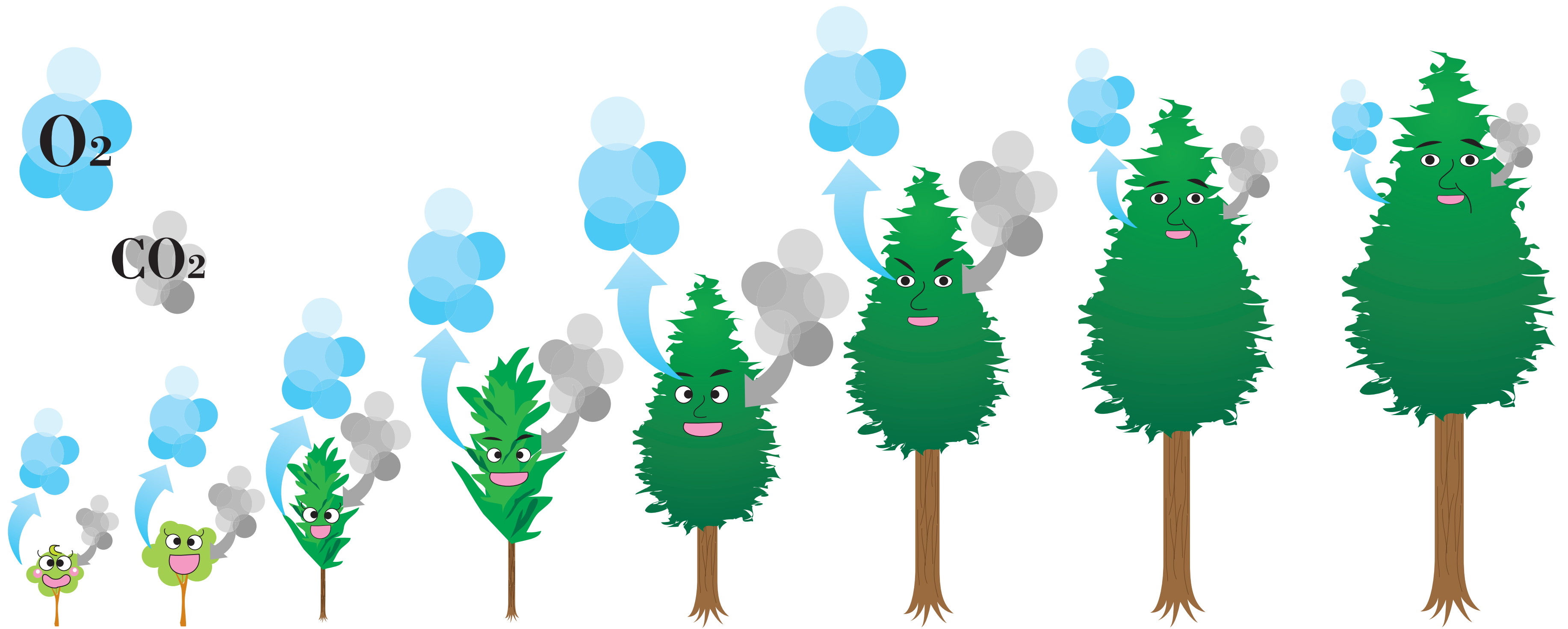


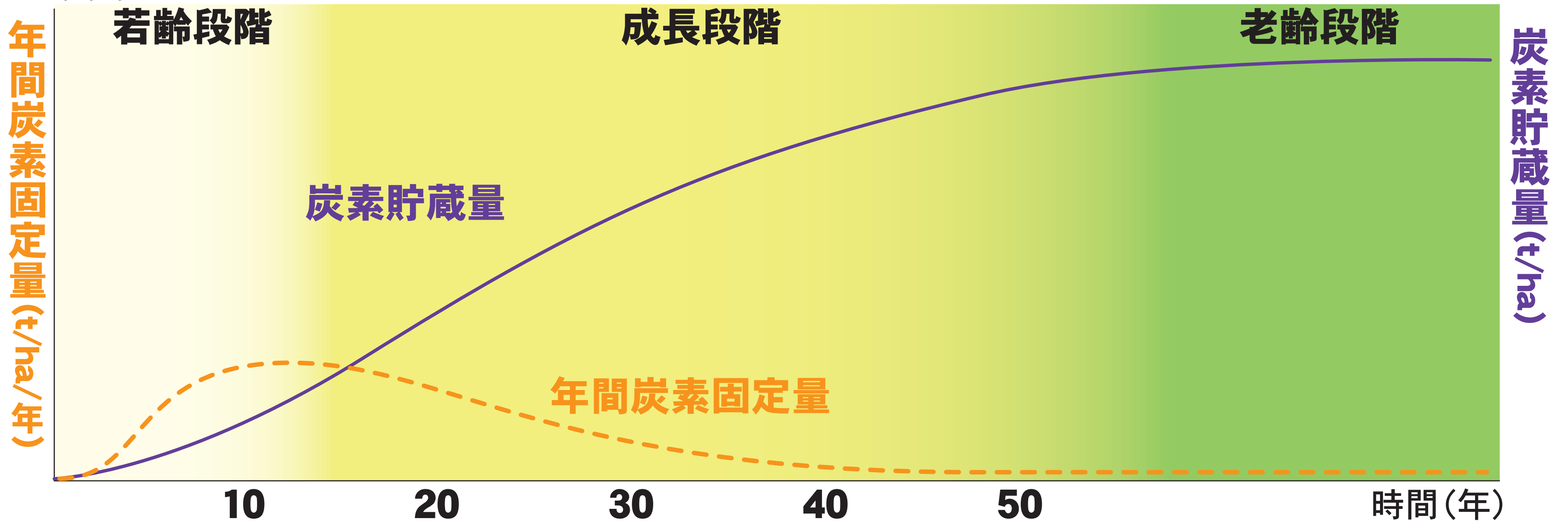
木は植えて育てることが大切です

成長期に最もさかんに二酸化炭素を吸収、炭素を固定します

樹木は、成長段階においてもっとも二酸化炭素を吸収し、炭素の固定化する量も増えます。杉の場合、40年から50年経つと老齢段階に入り、炭素の固定化は成長期に比べ、あまり進みません。そのため、成長した樹木は伐って木材資源として利用し、新たに苗木を植えて育てるというサイクルがもっとも有効な活用方法といえます。



炭素の固定化量の増加

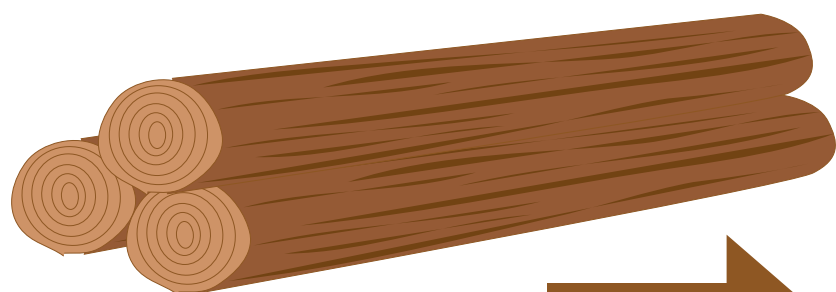


街は二酸化炭素を固定し続ける第二の森

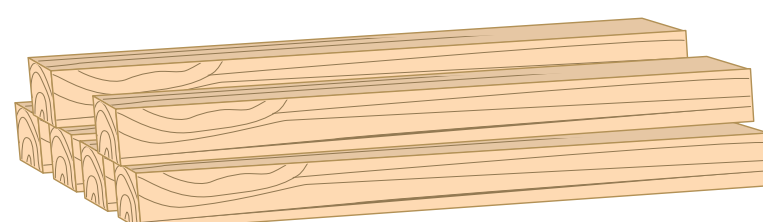
成長期を過ぎ、炭素を固定化する能力が少なくなった段階で、伐採、製材し、建材として建物の骨組みや壁や床などに利用されることで、さらに50年から100年間、炭素は固定され続けます。



伐採



製材



建材



木を多く使った住宅街は、多くの炭素を固定化した街として「第二の森」と呼ばれます。